

禅の友

Zen no Tomo

4

April 2019

特集
花まつり





ご本山だより 大本山永平寺【門出】

大本山永平寺 ☎ 〇七七六・六三・三一〇二



永平寺では、雪解けと共に新到の雲水方が入門してまいります。拙くも一心に修行に取り組むその姿は、春風の如くに清々しく私たちの初心を奮わせてくれます。瓦屋根の連なる修行道場の中央にはご本尊さまのおられる仏殿があります。毎年四月になりますと、仏殿の東西にあります紅と白の梅花がそれぞれに開き、仏殿の頬を彩ります。厳しい寒さを乗り越えて蕾を開く梅花の姿は、寒さと共に修行してきた雲水方を、お釈迦さまに代わって励ましてくれているかのようです。

さて、四月八日はお釈迦さまのお生まれになった降誕会ごうたんえです。新しい命が生まれるのはとても有難いことです。しかし、私たちは生まれると同時に、多くの悩みや苦しみも抱えていくものです。その様な中で、お釈迦さま

は二十九歳の時に出家をなされました。また、永平寺をお開きになられた道元禅師さまは、十四歳の頃（建保元年四月九日）に頭を剃り、次の日に比叡山の戒壇院にて出家をなされました。（『伝光録』より）

お釈迦さまの降誕会、そして、道元禅師さまの出家と、仏道修行の門出の月ともいただける四月でございます。

永平寺では毎年、四月の二十三日（二十九日）にかけて「報恩大授戒会ほうおんだいじゅかいえ」を営みます。「授戒会」とは、これまでの自己を顧みて、仏弟子として十六条の戒（皆と共に生きる生き方）をお誓いする仏道修行の門出の式でございます。すべての生きとし生けるものが安らかであれと願うお釈迦さまの願いを、皆と共に温めたいと願うものがございます。



ご本山だより

大本山總持寺【春の嶽山】

かくさん

大本山總持寺 ☎〇四五・五八・六〇二一

嶽山とは「諸嶽山總持寺」の略称で、

私たちは普段ご本山をこのように、親しみを込めてお呼びしています。

四月から今年度の夏安居制中に入り、首座和尚を中心し七月中旬まで、

一〇〇日間の集中修行期間となります。今春上山した新しい修行僧にとつては初めての制中で、戸惑いながらも必死に頑張る自分自身を自覚する時期でもあります。

八日は降誕会、すなわちお釈迦さまの誕生日です。「花まつり」ともいわれるこの日は十時から禅師さまのご親修で法要が勤まり、報恩婦人会や梅花講はじめ保育園の子どもたちが大勢お参りします。法要後は、天と地を指すお釈迦さまの誕生仏へ甘茶を注ぎ、供養にあずかります。

十日から十六日の七日間は報恩大授戒会です。全国から参集した戒弟子たちが加行を修し、お釈迦さまから脈々と相承した尊い戒法を戒師さまから授かります。

戒法を授かることは、仏道に真実に生きようとするでもあります。これを「菩提心を発す」ともいい、特に總持寺開祖・瑩山禅師さまは「菩提心を生生に発す」と誓われました。

戒法を授けてくださる江川禅師さまは、どなたにもこやかにお接しになり、合掌なさるそのお姿は私たちの心をいつも和やかにしてくださいます。

四月は、このような行持を緊張しながら修していく中に、春の喜びが感じられる時節です。



誕生仏（香積台総受付）

選・坊城俊樹

大悟徹底裸木となりにけり

兵庫県 西田 浩洋

評

「大悟」とは完全な悟りのことである。それを徹底するのだから、この木の覚悟のようなものがうかがえる。すなわち冬になり、一葉も残さず枯れ尽くしたこの木への、その見事さを称えた句とみるべきであろう。

吊革の透き通る指老いの冬

静岡県 末光 愛正

評

ご自身の指のことであろうか。吊革につかまっている指を見た時、ふと白く透き通る気がして老いを感じたというのである。混んでいる電車で、何処かへ行こうとされているのだから、まだまだお若いとは思うのだが。

◆ ひらかんとする冬薔薇に声かけり

静岡県 堤 千春

◆ 観音の肩越し遙か雪の嶺

福島県 渡辺 正一

◆ 亡き妻と対の湯呑みや年の暮

山形県 西田 忠二

◆ 心経の響く伽藍や冴返る

神奈川県 堀田 耕一

◆ この次と夫に約して毛糸編む

岐阜県 大下 雅子

◆ 宗道湖の暮色を曳いて浮寝鳥

神奈川県 小田 喜信博

◆ ぼんやりと柚子湯の香る中にみて

静岡県 望月 かほる

◆ 三が日や海女小屋閉ざす波の音

兵庫県 内藤 昭子

◆ マラソンの走るも観るも息白し

静岡県 石濱 徹

◆ 大仏の背にある大きな寒さかな

埼玉県 松枝 勝一

選者吟

春の土うらがへしては土の春

俊樹

作句小見

なにやら言葉遊びのようであるが、昔の想い出である。子どもというものは、野や庭で遊んでは土を掘ったり、物をひっくり返したりしたものだ。そのとたんに、春そのものもひっくり返って土の春となった。

選・長澤 ちづ

真つ直ぐに的打つはずの矢が落ちて悔い
多かりき青春の日々

山口県 濱田 道子

評 青春時代への悔いがストレートに詠われてい
て共感する。誰しも的に中らず折れてしまつ
た矢のいくつかを持っているはず。節目の年
でもあれば感慨はひとしおである。

霜月の雨に濡れぬる浄瑠璃寺当尾の里は
ただに濡れをり

島根県 横山 豪吾

評 上の句で浄瑠璃寺に焦点を当て、下の句では
当尾の里全体を写すというカメラワークが巧
み。雨に濡れた霜月の当尾の里のしっとり
とした情緒が豊かに伝わってくる。

- ◆ 長靴に草鞋履かせて石蓐摘む大方老いし男鹿の海女どち
秋田県 小田篤 恭葉
- ◆ 亡き父の背かと思ふ縁側にロツキー背を丸めてねむる
福岡県 三吉 誠
- ◆ 携帯の着信音のバツクから夫の声して昼の催促
新潟県 星野 三興
- ◆ 亡き母の針箱の中指ぬきをさがし出して吾の指にはめ
秋田県 小松 紀子
- ◆ さわがしく朝戸開ければ電線に青いインコが二十五羽いて
ロサンゼルス 井上 健一
- ◆ 寝ねぎはに眺むる空の白き雲月光射せば曼荼羅のごと
山形県 斎藤 弥生
- ◆ 風雪の強き岸辺にハングルの文字鮮やかな漁具漂えり
鳥取県 山本 浩一
- ◆ 野仏の台座に生ひ数くホトケノザ小さきくれないひ供花のごとし
静岡県 杉原 民子
- ◆ 朝夕の時間知らせた仙人のエンジン音がとわの眠りに
三重県 西村 廣視
- ◆ ほのぼのと吾妻小富士の冴えゆきて雪かづく嶺初日に光る
福島県 大槻 弘

選者詠

せかせかここで足踏みしてる間に死と対話する友の居ること

ちづ

作歌小見

生死について考える間もないまま死を迎える人、病を患
い否応なく死について考える人、等々死との向き合い方は様々です。
深く思索しつつ日常を詠うことが大切かと思えます。些末な日常報
告の短歌に終らないために。